
story～真実～ <快青>

Keiko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

story 真実 〉 快青く

【Nコード】

N0158N

【作者名】

Keiko

【あらすじ】

快斗と青子は、自分の気持ち、それからお互いの気持ちにも気づき始めて距離を縮めながらも、まだその先に進めないでいる。

そんなある日、青子は快斗の部屋にある隠し扉に気づいてしまい・・・！！？

という話を、夏っぽく、ちょっと甘めな感じで書いてみました☆

(前書き)

快青がすぎすぎて、 「キッドの正体がもしばれたら・・・!？」
話を書きました^^ な

それは、俺の人生の中で最も記念すべき、最悪かつ最高の日の話。

あいつはいつもそうだ。

突然やってくる。

しかも、鍵がかかっていなければ勝手にドアを開けてくる。
バタバタと階段を駆け上がる、その足音。

青子が来たな・・・

「快斗！ まあーた鍵閉め忘れてる！ 泥棒でも来たらどうすんの？」

「あー。泥棒より厄介なのが来ちまったがな」

ベッドに寝そべって雑誌を読んでいる・・・振りをしながらボソボソ返事をした。

実はつい今しがたまで隠し部屋の中にいた。

次の土曜に銀座の宝石店で頂くお宝のイミテーションを作るという、地味な作業中だったのだ。

青子が来た事に気づき、猛スピードでベッドに転がり込んだところだ。

指先についた接着剤を青子に見られないようカリカリ落とした。

「失礼ね！ もう！ せっかく観たいって言ってたDVD、借りれたん

だから！明日返さなきゃだし、一緒に観ようと思って持って来てあげたんだよ！」

そう言いながら、慣れた手付きで俺の部屋のプレーヤーを操作し始めた。

すかさず、からかってみたくなる。

「俺が観たいって・・・エッチなやつだろ！？オメー、そんなもん俺と観てどーすんだ？」

青子の目がみるみる釣り上がった。

「んなもん借りるわけないでしょおっ！？このバ快斗！！“ 星空の難破船”のことだよっ！！」

ムキになった青子の怒号が飛んできた。

悪趣味だと思われるかもしれないが、俺はこの顔見たさにわざと青子が怒るような事を言う。

この顔が、妙に可愛いのだ。

もちろん、笑顔の次に。

「冗談だよ冗談！んなムキになんなよ。待ってろ、なんか飲むもん持ってくっから！」

とりあえず満足した俺は階段を降りてキッチンへ。

夏はやっぱり、カルピスだね。

鑑賞の間に飲み干してしまわないよう、ジョッキで作る。

「フンフーン♪フンフーン♪」

いつも原液を入れ過ぎだと母親にケチ臭いことを言われるが、今日は留守にしているので甘さ割増しだ。

青子とDVD鑑賞なんて久々のことで、俺は少々上機嫌。マドラーを液体の中でくるくる回すと、氷がいい音を奏でた。ふと、自分の顔がにやけていることに気づく。

「いや、別に、あの映画が観たかったただだからな。」

意味もなく自分自身に言い訳をするが、俺もいい加減わかっているのだ。

自分の中で彼女の存在が、ただの幼馴染みではなくなっていることを。

それは恐らく、青子にとっても同じである。

ただ、長年“幼馴染み”という存在だった人物を新しいカテゴリに入れることへの躊躇いが、その関係の進展を阻んでいた。

爽やかな乳白色で満たされたジョッキ二つを片手で掴み、もう片方の手でスナック菓子を適当に拝借し、軽い足取りで階段を昇った。

「お菓子もあるぞーってオイ！青子いねーし！！」

トイレにでも行っているのか？と思ったが、俺はすぐに気付いた。壁に描かれた親父の肖像画が、怪盗キッドの姿にすり替わっていることに。

初めて見るその絵。

父が扮した怪盗キッドの姿。

その出で立ちは他を圧し寄せ付けようとしないう冷涼な雰囲気を纏い、手の届かない遠い存在のように見える。

俺にとって、唯一無二の存在――

普段その壁にはマジシャンである父が描かれており、隠し部屋から見たときも同じだった。

両面ともこの絵なのか、それとも俺の見えていない片面は違う絵なのか・・・考えた事もあったが、その答え合わせをこのような形ですることになるとは思いもよらなかった。

まさか・・・

何かの間違いだろ・・・

間違いであってくれ・・・

そんな願望にも似た思いを巡らせながら、扉を押した。

しかし、わかっていた。

間違いなどない。

この状況で、例外などない――

ほの暗いその倉庫のような空間には、さっきまで聴いていた音楽が微かに流れ続けていて、それがより一層静けさを際立たせている。

その中に佇む影を確かにこの目に捉えた。

その扉は、もちろん普段は俺以外が開ける事はできないようにしている。

しかし、突然の青子の訪問に慌てていたあまり、扉のロックをかけ

ずにいたのだ。

そんな先刻の自分の浅はかさを今頃恨んだところで、どうにもならない。

いま、俺にできることは、全力でごまかす事。

いままさにキッドの衣装をそつと指でなぞっている青子に。

「それよくできてんだろー！親父の趣味だったらしいぜ。それにしてもオメー、よくこの部屋に気付いたな」

さり気なく青子の横に並び、さり気なく話しかける。

「知らなかったな、こんな部屋があるなんて・・・」

「ああ、俺がここに気付いたのもつい最近だからな。死んだ親父のこういう趣味を見ちまうのもなかなか気まずいもんだな。！」

そう言いながら少し離れた作業テーブルの上にある完成間近だった宝石の模造品に布をかけた。

「快斗・・・」

そう俺を呼びかける青子の声は、聞いた事がないほどか細く、弱々しく、震えている。

状況はあまりよろしくないことは明らかだ。

「なんだよ青子、そんなミミズみてーな声出しやが・・・」

「怪盗キッド・・・なの？」

やっぱり、きたか。

青子がどこまでこの部屋の中を見たのかは解らないが・・・

疑うには、コスプレ用とはとても思えない上質なあの純白の衣を見れば十分だろう。

しかし、バレてはいけない・・・

青子にだけは、絶対に・・・

「おいおい、それウケねーぞ？俺みてーな高校生が怪盗キッドなわけあるかつーの！だからオメーはアホ子なんだよ」

最高に呆れた顔を作り、青子の手首を掴んだ。一刻も早く俺の部屋に帰らなければいけない。

しかし青子は俺の手を振り払うと作業テーブルに向かって行く。

俺の背中にひやりと冷たい汗が流れた。

「じゃあ、いま隠したこれは何よ？キッドが今度狙ってる宝石にそっくりだったの、青子見ちゃったんだから！！」

やはり見られていた。

次の予告についてはテレビで連日報道され、あの宝石もお茶の間に何度となくお目見えしているから、青子が知っていて当然だ。

しかし、ごまかすしか為す術はない。

「あー、それは手品で使う小道具だよ！テレビで毎日このお宝見てっから似たようなの作っちゃったんだよ。」

「嘘！お父さん言ってたもん！泥棒が宝石を盗む時はニセモノを用意してくるって・・・！」

俺を追いつめようと強まる語調と半比例するように、青子の表情は沈んでいく。

正直、俺は焦っていた。

俺をキッドだと言う青子の声も顔も、既に疑いではなく確信しているように見えたからだ。

それでも、俺は認めるわけにいかない・・・

「だーかーらー、それは俺がキッドだったらの話だろ？オメーよく考えろ。んなわけねーだろ？」

「じゃあ、なんで快斗が宝石店のあるビルの設計図持ってるの!？」

こっちもか・・・!

模造品を作っている横に置いてあるが、それを見たところでわからないだろうとタカを括っていた。

やはり警部の娘だからか・・・妙なところは頭がキレやがる。

これは、面倒なことになった。

どうする・・・どうする・・・

とにかく何か言おうと口を開きかけるとそれより先に青子が言葉を発した。

「今までにだって・・・もしかしてって思ったこと何度もあったよ。」

「・・・!」

俺は情けないが言葉が出ない。

「それに、快斗が見せてくれるマジック、ほんとにすごくて、かっこよくて、こんな事できるの快斗の他にはキッドぐらいしかないと思った。」

逆に、キッドを見てると、快斗ならできちゃいそうって感じてたよ。でも、思い過ぎだと思うようになってきた。

それが今日、ああ、やっぱりそうだったんだって……。
だから、もう誤魔化さないで？」

俺は……俺はどうすればいい……？

青子が毛嫌いしているキッドが俺だと知ったら、青子は離れて行くだろう……

俺は失うのか？青子という存在を。

今までの二人が、なかった事みたいになるのか？

何か言わねーと……

しかし、出かかったいくつもの誤魔化しの言葉は、真っ直ぐ俺を見据えて微かに揺れる二つの瞳を見ると、瞬く間に消えてしまう。

流れる沈黙に耐えかねたように青子が表情をフツと消す。

「ひどいよ、快斗……青子帰る……」

それだけ呟くと身を翻し出口に足を踏み出した。

「待てよ！」

俺は反射的に青子の腕を掴んでいた。そんな俺を、青子は無理矢理

張り付けたような笑顔で見上げた。

「・・・お父さんには言ったりしないから安心して。ていうか、こんなこと、言えないけど。」

その時、揺れていた青子の瞳から、こらえきれなくなったかのようにポロリと雫が落ちた。

それをみた俺の思考は、ついにオーバーヒートを起こした。
気付いたら青子の両肩を掴んでいた。

「青子・・・！！俺が何の理由も無しにこんなことやると思うか！？」

「・・・・・・・・」

「ただおもしれーからやってると本気で思うか！？キッドが俺だとしても、オメーはそう思うのか！？」

「・・・快斗・・・？」

俺は多分、ラクになろうとしたんだと思う。
認めたくはないが、青子に甘えていたんだ。

その時は、ただ感情の赴くままに動かされていたのだけけれど。

青子の肩を掴んでいた手から少し力が抜けると、俺の口からは自然と言葉が紡がれた。

「・・・青子の言うとおり・・・キッドは・・・俺だ。」

さっきまで俺をまっすぐ見据えていた視線がブレて空を切った。
短く息を吐くと俯き、肩を震わせている青子は、見た事もないほど
小さくなっている。

「こんなことオメーに言えるわけなかった・・・」

再び静寂が部屋を支配する。

真実を告げた数秒前の出来事を繰り返し脳内再生しては、もう引き
返せない事を悟る。

俺はただ、次の青子の言葉を待つしかなかった。

今にも泣き出しそうな顔で肩を震わせる、青子の答えを。

「言えるわけなかったって・・・それは・・・青子のお父さんが
警部だからでしょ・・・!?!」

「ちげーよ・・・」

「バレてすぐ捕まっちゃうからでしょ？」

「そーじゃねーよ!?!」

「何が違うの!?!」

青子が俺の胸倉を掴んで体を揺さぶる。

再び俯いた青子の足下に、無数の水玉模様が散りばめられた。

無意識・・・そう、それは無意識だった。
自分の意思と無関係に行動することなど、あるはずもないと思って
いた。
しかし、俺の中の全細胞が“ そうしたい ”と叫び声を上げたかのよ
うに、気付いたら青子を自分の腕の中に包み込んでいた。

「ちげーんだよっ！

オメーの親父がキッドを追う警部だからとか、そんなんはどーでも
いい。

俺は、俺はただ・・・」

青子を抱く腕が、心なしか熱を帯びていく。

「ただ、好きな女の悲しむ顔が見たくなかったただけだ・・・」

そう、その言葉も驚くほど自然に口にしていた。

やっぱり、俺は青子が好きだったのかと、その時やっと認識できた
くらいに。

頭で考えるより、心が先に動くというのはいくつかの事をするのにも
しれない。

青子は真っ直ぐ俺を見据えたまま、まるで電池が切れたかのように
動かなくなり、やがてズルズルと床にへたり込んだ。

俺は慌ててその体を支えながら一緒に屈んでやる。

「あ・・・青子・・・」

顔を覗き込もうとした瞬間、青子は火がついたように泣き出してしまった。

その手は俺の背中をしっかり掴んでいて、それがやけに胸を息苦しくさせた。

「ふえええええ・・・！！うっううう・・・」

「ゴメンな、青子・・・ゴメンな・・・」

「なんで・・・違うって・・・突き通してくれないの・・・ふえええ・・・」

背中をさすってやるが、収まる気配がない。

どうすればいいのか、どうすればよかったのか・・・わからない。

予告現場では赤子の手を捻るように人々を翻弄する俺が、完全に打つ手が無くなっていた。

ただ抱きしめることしかできないでいた。

「かいと・・・ずるいよ・・・ふ・・・ううっ・・・そんなんっ・・・」

「うん、ゴメン、ゴメンな・・・」

「・・・ゆわれたら、どうすればいいかつ・・・わかんなくなっちゃうよ・・・っ！！」

「うん・・・」

「あたしだって・・・快斗がすきなのにっ・・・ううう・・・どうしたらいいのお・・・？」

俺はそこで初めて、自分の卑怯さに気がついた。

俺は青子の気持ちを知ってて、だからこのタイミングで好きだと言ったんだ。

その気持ちに嘘はないが、結果的に青子を苦しめている。

青子は戦っている。

想いを遂げたい自分と、警部の娘としてキッドを認められない自分とで。

もし俺が想いを告げなければ、青子は俺の隣から消えただろうか。そのほうが苦い思いも半分だっただろうか。

いや、そんなことはない。

そんな簡単じゃないはずなんだ。

俺らは。

「青子、聞いてほしい。・・・俺がキッドを止める日は必ず来る。

ただ、目的を果たすまでは、キッドであり続ける。それは譲れねえ。

」

青子が腫れた目をようやく上げた。二人の視線が絡んだ事に、妙な安堵感を覚える。

「目的って・・・？」

俺は、全てを話した。

それが盗みを働く正当な理由になり得ないことはわかっている。ただ、青子にもう隠し事をしたくなかった。

俺の親父が死んだ本当の理由を聞かされ、青子は悲痛な表情を見せ、また涙をポロポロと零した。

そしてその真相を暴くという俺の真意を、理解しようと努力してくれているのがわかった。

「青子、ありがとな・・・俺、実はスゲー怖かった。青子が俺から離れて行くのが・・・」

俺の胸に顔を寄せる青子の耳元に囁く。

自分の想いを素直に口にできていることが、自分でも驚きだった。

「うん・・・正直ね、今も、信じられないし、信じたくない。それに、こんな危険なこと、ほんとほしくないでほしい・・・」

「ん」

「でも、それでも信じてみるよ・・・好きって言ってくれた快斗と、快斗が好きな、自分を・・・」

——やべえ。

俺いま、スゲー幸せかもしれんね！。

雨降って地固まる？

まさかの逆転満塁ホームラン？

とにかく。

その日は俺にとっての、最高の日になった。

「んじゃ、観ようぜ！オメーの借りてきたDVD！」

「うん。」

テーブルの上に置かれた、氷が溶けて薄くなってしまったカルピス。
俺の腕の中に収まって、テレビを見入っている青子との時間が
、その甘さを補う。

愛しくて、苦しくて、たまらない。

新しいストーリーが始まる——

(後書き)

続きは・・・あるような。ないような。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0158n/>

story～真実～ <快青>

2010年10月28日02時40分発行